

## 再度してはならん語り継ぎ

滋賀県 清水 誠之助

おいたち

滋賀県は湖南平野の野洲郡野洲町で、町内に聳える近江富士を美しく眺められる野洲川辺りの、日本徴兵保険代理店もしていた農家の長男として生を受けた。

大正十年十月とは平和な時代ではあったが社会はだんだん不景気に向かっていた。小学校入学を前に、昭和二年十二月三男を出産した母が産後の経過が悪く五日目に他界してしまい、乳呑み子を残された父は若かったので後妻を迎えた。小学校へ入学すると同時に世は不景気へと進んだ。学校（大学）は出たけれど職は無くの時代で、失業者（ルンペン）といった人達が西から東へ、東から西へと街道（国道中山道）を往来していた。小学四年生（昭和六年）になると満州事変勃発、農学二年の昭和十二年には日中戦争、昭和十三年

張鼓峰事件、昭和十四年ノモンハン事件、昭和十五年日独伊三国同盟成立、昭和十六年、とうとう太平洋戦争へと突入した。

農家の長男でもあり、あまり向学の志もなく出来もよくなかったこともあるが、「あいつが行くなら俺も行くか」で近くの県立農学校を受験。昭和十四年卒業すると、どこに就職するともなく県農業試験場へ研究生として入るが、しばらくすると県種畜場の助手として辞令が出た。行きたくない所へ仕方なく行ったが、そこへ母校の先生や同輩の学校の助手の勧めで京都の女学校へ就職した。早い転出に場長に戒められた。就職についての大事さをあまり意識してないようで、次は家族の祖父の要請で国鉄へ行くのだが、これこそ兵隊に行くまでと転職した。

職場は大阪鉄道管理局宮原電車区で、職種は車両手だった。区内での上進の職種は運転士であり、しばらくしてすぐ募集される電車運転士の試験を受けて教習所電車運転士科へ入所した。無事卒業し、宮原電車区に帰り運転士見習いを終え本務試験を受け合格。通常

満二十歳にならないと一人乗務は出来ないが、中卒以上者の特例で一人乗務が出来た。当時高速運転では東洋一を誇る京阪神間の運転をして、入隊した。

大阪鉄道管理局は昭和十七年一月十日、管内より入営する者を国鉄の寮に入れて数日の軍事教育をした。

教官は職員の中で除隊をした予備役の将校だった。その中で学校で配属将校の軍事教練を受けた自分が小隊長として行動させられ、皇紀二千六百年で沸く橿原神宮への参拝もその中に組み入れられていたことを思い出す。この訓練を終えて休職し入隊となったが、十二月八日すでに太平洋戦争は始まっていた。

家には祖父、父母、弟四人を残し、清水家を代表する形で当家初の軍人として、君主制の下、軍国教育を受けた青年は何の抵抗もなく命を捨てに征くのであった。

#### 徴兵検査入隊

昭和十六年になると徴兵検査を受けなければならぬ。甲種合格と思いきや第一乙種であった。当時若者としては悔しかったが、第一乙種は甲種と同じ扱いで

ある。原因は左肺炎下垂である。農学時代冬の柔道の寒稽古で左鎖骨を骨折した時に肺炎下垂をおこしていたらしい。以後レントゲン写真でよくひっかかるが現在まで何ともなく過ごして来た。結果は第一乙種ではあったが、野戦道路隊要員として薦の十六(工兵)中部第四十一部隊に入隊することになる。わずかの日数のうちに壮行会や送別会をこなし、親戚友人にも入営の別れの挨拶をして来て、遺髪を残して一月九日出発であった。

十六年徴集の一番の入営は十七年一月十日である。祝入営、祝出征の幟や旗をおし立て、愛国婦人会や国防婦人会の禱を掛けた勇ましいおばさん達や家族に送られ小学校へ。学校で町内の入営者の壮行会を終え、入営者を先頭に駅まで軍歌を歌い日の丸を振って小学生に送ってもらい乗車。発車すると万歳万歳で故郷を離れた。京都では、その日は指定旅館に勢揃いして翌十日同時に入隊となった。指示に従い着替えをする。天皇制軍隊の神国を信じ神風を信じた兵隊が出来るのである。一日でも早く兵隊になった者の意に背けばた

まったものではない。テキパキと動き、要領よく班付上等兵や古兵に目を付けられないようにしなければピンタが飛んでくる。私的制裁を受けるのである。部隊長・中隊長・将校連中は制裁を禁止していたが班内では日常茶飯事のようにされていた。動作の鈍い者は將軍玉と言われた。將軍玉になるとピンタの鈍くなる。

四月二十五日まで中部四十一部隊二中隊（伊藤隊）の野戦道路隊要員として工兵科の訓練を受ける。冬の淀川で鉄舟の扱い、爆破火薬の扱い、連結、円匙十字手での穴掘り等を短期間で終えて四月二十日には一期の検閲を受けた。外出も出来るようになり、二回目だったと思うが、以前勤めていた町内の女学校を訪問したのが悪かった。寄宿生の防空防火訓練をしているところへ米機の日本初空襲があった。一番に帰営していたのに、昼食をいただきビールを呑んで帰ったので叱られた。営倉入りが普通なれど転出間際でありお叱りだけで済んだが、これが後々の進級にも幹部候補生にも関係するようだった。しかしこれがまた、今日まで生きていることが出来たことにもつながる。人々は

これを運命と言うのかも知れない。仲の良かった戦友伊吹も、緒に連れて行き怒られた。彼も落幹で本部書記であったが、帰国して建築会社のエンジニアになった。大津でしばらく付き合ったがもう亡くなってしまう。

営倉もピンタもくわらず済んだ理由は別にあったと思う。女学校は出したくなかったが、京都の北端にある植物園まで行っていた者が早くに帰っているのに、伏見桃山にいて遅い理由をとことん聞き出されて、女学校での昼食の話を出した。何をしてたかを問われ、勤めていた事を言ってしまったが、その女学校は隊の防空幕の縫上や兵隊の襦袢袴下の手入れの勤労奉仕をしてれていた。そのためかどうか理由は定かでないが罰を受けずに済んだ。空襲中に女学校で酒を呑んだことは同年兵の話の種だった。

#### 運命の満州へ

銃後の母や妻、恋人達は、戦地に向かう兵達が無事に帰ってくるよう願いを込めて千人針を作って、出征、入営する者に携行させたものだ。

辛い厳しい初年兵教育を終えて、花咲く京都を後に東満の国境東寧へと出発。四月二十五日、部隊を後に京都駅へ家族等の見送りを受け宇品港へ。二十六日出航、三十日大連着。五月一日出発、五月四日東寧着、関東軍第三軍第四六野戦道路隊（満州第三六一一部隊）坂場隊に入る。しばらく基本教育の再教育を受け、国境の道路造りや第三軍の「し号演習」に参加。一方で、娯楽の演芸会をよくやった。内地伏見部隊で習った軍隊諷刺の歌を国境の部隊の初年兵がやったものだから水戸学者の坂場隊長はひどく嘆かれた。いつも穏やかな人で、関特演で召集された自分達の親に近い年の、昔の一年志願兵（幹候）の教官であった。帰国してから聞いたが、坂場隊長もシベリアで亡くなっている。幹候要員であり教育訓練も何につけても人には負けずいつも張り切っていた。班内でも先頭にいたし、同僚からも認められていたが、幹候は駄目、その落幹の仲間も大勢いた。

我々は演習はなく行く所がなく毎日ぶらぶらしていた。そのうち字の上手な者から本部中隊等の筆耕にそ

れぞれ就いて行った。自分も兵器員室に行ったが、間もなく今中主計に経理室へ来いと言われる。字も算盤も下手だからと断ったが経理室に入る。予備計手になれと言われ、皆と同時に満期ができるならと同意。初年兵がはやこんなことを考えていたのだから、たるんでいたか？

これがまた自分が今元気でいることにつながるのがある。我が道路隊は三六〇五、三六一九、三六一一の三部隊が同所において、経理室は一室で仕事をしていた。私が入る前に三六〇五が黒河の三神府へ移動していた。その三六〇五が奉天へ、奉天からボルネオへ転進。その後を追って三六一九が黒河へ、終戦時は奉天に来ていた。経理室は三六一九が出る時は大変だった。当時二一八部隊経理室が分かれて三六一一部隊経理に、留守部隊であった。人員が多い時は仕事の持ち分も少なかったが、分かれるとなると持ち分が多くなるので、自分の分を皆に説明し支障のないように勉強会をした。当時の主計は学習院・東大出の子爵の橋本中尉だった。満期除隊されると同年の九大出の古賀見

習士官、京大の今中主計は三六一九へ転出される。関学・関大の乙幹連も皆よい人達であった。

三六一一には中国人捕虜がいた。また満州の勤労奉仕隊も使って作業をしていた。經理も臨時軍事費、国防分担金、共有金と、他部隊より多くの変わった決算を毎月しなくてはならなかった。星二つの一等兵が第三工兵隊司令部や軍經理部まで決算書を提出に行ったものだ。經理室の仕事はするが中隊の仕事はしない。

また前にも記したようにたたり物があり、三年兵の六月になるまで一等兵だった。軍隊ではこれを神さんと言っていた。当隊は作業場が多く副分任官の仕事も多かったため、上等兵でその仕事もさせられた。隣の部隊の予備計手が任官しているのを聞いて三軍へ申請したら、自分の初年兵と同じに任陸軍主計伍長に任官した。

当隊の隊長は臨時の作業隊をよく編成し、その部長になった。經理は、臨時軍事費もあるが満州国の国防分担金もある。新任の主計はその經理が出来ないので、よく引き出された。開戦はその臨時部隊へ出張の

形で派遣されている時だった。満州内で作業をしている部隊であったが、糧秣輸送の輜重隊と經理室は北鮮の訓戎貨物廠に駐留していた。糧秣受領も銀行や商取引も豆満江を渡らないと仕事は出来なかった。その時本隊から古賀主計が来てくれていた。本隊は辻井主計軍曹のみで留守であり、二人で本隊復帰のため八月十日朝鮮より満州図們へ着く。東寧行きはないので交通部を訪ねるが情報はない。図們交通部は隊の作業隊を派遣していたから関係があった。一夜を明かし弁当をもらい移動の準備をする。八月十一日外に出ると城子溝の兵隊に会う。いつ来たか聞くと昨夜東寧の最終列車で来たと言う。うちの隊の情報も聞いても知らない。彼等は僕を主計と知って食を乞う。少人数と思つてにぎりの弁当を与えるが、人が増えて来た。主計が前渡し金を持っていたので食堂を頼むが追いつかない。部隊の給与を頼む。こんなにはばらばらに図們へ来ているのならうちの隊員も一人ぐらいはと思ひ、駅へ探しに行った。図們駅で探していると經理室の初年兵が車を引いて来るのに出会う。城子溝の最終列車で全

員来たと言う。交通部にはお礼を言つて去る。図們駅で合流することが出来た。本隊も食うものがない。列車が動かないうちに、第三工兵隊司令部の副官が図們的の工兵隊の部隊長であつたので、その隊の給与を受けに行つたのに出会つた。部隊長は隊員を元氣付けるため酒を買つて来いと言う。苦勞して酒造酒屋で四十本の酒を買つて来た。ようやく動き出し、八月十二日間島（延吉）に着く。通信隊の兵舎を借りるのであつた。

平時は前線で作戦道路造りである野戦道路隊であるが、間島へ着くと軍工兵隊に変わり、戦車攻撃、橋梁爆破と任務が変わる軍命令が出て来た。寄留部隊の給与であるため特別食は出来ない。戦車攻撃班で行く者に御馳走を買つて来いと部隊長に言われ街へ出て行くが、そんな店はない。鶏一羽も買えない。また一人で歩ける所ではない、朝鮮人が多く不安な所である。間島電々の前に日本人が集まつていて重大放送があると云う。これが玉音放送である。ポツダム宣言を受諾せりと聞く。聞いていたその場の日本人達は、「嗚呼こ

れでおしまいだ、日本は無条件降伏だ」と叫ぶ人も泣き出す人もあつた。その空しさを胸に、何も買えないし、重大ニュースを持ち帰る。途中ソ連の飛行機が空を行くが、朝鮮人は知らぬ顔で隠れようともせず歩いている。隠れる木もない所で溝に身を伏せていた。間島は金日成のいた所で、日本軍の車に朝鮮人の子供が昼間でも投石した所であつた。

帰つてポツダム宣言受諾せりの話をして怒られた。まだこれから戦車攻撃に出て行くのに士気が衰えるからであつた。そのうち通信隊で放送を傍受していて隊内にも伝わってくるが、近くにあつた軍司令部の命令は遅かつた。間借りで給与を受けている味気なさから、主計の仕事として早めに糧秣の収集にとりかかる。ソ軍が入る前で武装解除前と思う、倉庫酒保等回つて米、牛銜等手当たり次第集め、全員に米を軍足に詰めさせ缶詰も持てるだけ持たせた。以後の自炊に糧秣は受けるものの二カ月ほどの食事の足しになつた。現地には豚がいても、道具もなく屠殺出来ず困つた。隊はそのまま煉瓦の兵舎から半地下の急造兵舎へ

移動。戦車攻撃隊も満服のボロに変身して帰って来た。全員無事のものであった。ここでダモイ編成である。

#### 大隊の編成移動

工兵隊の将校を隊長に千人単位の隊を編成するように指示された。これは道路修理をする作業隊だと思った。我が隊は工兵隊だが、これより外れた方がよいと考えて、隊長を本隊の副官島山大尉に、軍医も本隊の水野大尉に、主計も本隊の占賀少尉に、衛生下士を堀軍曹、経理を辻井軍曹と自分達の隊の人員で本部を作り、一、二、三中隊は他の部隊であったが、四中隊は工兵以外の我が隊の隊員と関係のあった人達を加えた。携行医療具、糧秣を受け、馬車一台、自動車一台を付けて移動が始まる。

個人の被服携行品は検査を受け数の中に入っていた。ダモイと思っているから荷物が多い。一日二日と歩きかけると重くて、耐えられない人は休息のたびに捨てて行く。それを皆馬車や自動車に回収して行った。途中の畑にも何もない。食料の足りない人も出て

くる。本部へ何かないかと尋ねて来るので、「コーリヤンならあるが、それで良いか」と。だんだん糧秣も不足してきた。

凶們から清津か羅津かと思ったが通過、璽春も通過してクラスキーノ丘へ、ポシエツト湾が見える。野営中はウラジオストックからかと考えていたが、九月下旬貨車に乗る。ウラジオ富士が見える、それを後に西へ。ウラジオもだめならどこか。夜ハバロフスクに着く。検査係が車両点検をしている。井上氏が行き先を尋ねるとコムソモリスクだと言う。持っていた日本の地図にはなかった。そこは新しい青年共産同盟の町でラーゲルがあった。ダモイ東京はウソ!!

間島を出発して間もなくはハルビンにいたと言う少しロシア語を話せる人が通訳であったが、次に、二中隊だったか中隊長が知らせてくれたのがシベリア出兵当時ウラジオストックの小学校で正課でロシア語を習ったという井上氏だった。当時四十五歳で、小さい人であったが現地召集されて来た人だった。私が間島の部隊で拾って来た八杉先生のロシア語文法と日露会

話集、ソロバンがポロポロになる程に役に立った。井上氏は基礎が出来ているからペラペラ、自分もお蔭で得をした。すぐロシア語のアルファベットをマスターして、何回も大隊の名簿を作ったことがある。井上氏がいてくれて我が一大隊はほんとに助かった。井上氏は早くダモイされたが、時計屋のようであった。時計の修理道具を持っていて、最初は日露の所内の時計修理をしていたが、後、隊の通訳をしながら分所の事務所横に時計修理店（チャソオイマッセルスカヤ）を出店し、若い日本人の助手と二人でノルマを上げてくれた。

私もグループに付いて作業に行った。最初の間は員数外で行って手伝っていたが、作業のグループが増加すると人数が足りない、それを補うため班長（ブリガジール）としても出て行った。班長がロシア語が出来ると相手も喜んだ。指示された通りやるから双方よかった。ロシア人に付き切りでダワイダワイと追い回されるのと、いないのでは違うからだ。私と行くグループ員は喜んだ。

#### ラーゲル第二分所

私は二分所には一番に開けて入り、所内を整理したが、最後まで所内整理してソ連側に引き継ぎをして帰ることになった。私の大隊は第一大隊で、第二分所へ最初に入った。コムソモリスクでは最大と思う。最初七大隊七千人が入所した後、転出して三千人くらいになり、所内三分の一に。セントラルホスピタル（中央病院）が出来る。最初に入った私達は、先ず自分等の枕、薬布団の草刈りに、刈る道具なしで街外れの草原へ枯れ草をひきちぎりに行つて、翌日には次の入所者の分と続けた。先ず所内の整備を指示された我が大隊は二分所の功労者だった。そして、我が畠山大隊長が老体で、帰国寸前になった時期突然倒れなくなった時、所長より「畠山大隊長は收容所の功労者だから日本式に出来るだけ立派に收容所葬をしてやってくれ」と言われ、所内隊員の中から僧侶数人にお経をあげてもらい、焼香はマホルカで代用して式を終えた。所長は中尉でタタール人、近くの官舎に四、五歳の男の子と夫人がいた。人となりはよい人であった。門前の小

僧であった所長の子供は日本語の歌を歌っていた。日本人が毎日やっているから覚えるのだ。数日後、金沢市百姓町のご婦人から町内で未だお帰りにならないのは貴方だけですとの返信葉書が届いた。なんと空しいことであったか。

後に平成四年、五年と墓参にコムソモリスクを訪れたが、墓はなかった。五十年ぶりに留守家族を探し、その旨を報告した。

このラーゲルは元は何だか知らないが人の住んでいたことは間違いない。バーニヤの設備も揃っていた。便所には驚いた。日本人には想像もつかない（中国もよく似ている）。ニメートルの深さの広い穴が掘ってあり、それに桁をかけて板が張られ、踏み板が並んで打ち付けてある。囲いはあるが仕切りはない。やっぺいあるその様はカラスが電線に並んで止まっているようである。飛び立つのを前で待っている。冬は大便のピラミッド、足で蹴っても折れない。中腰で山を避けてしなくてはならない。小便所も同じで、漏斗は水の山、飛滴が山になり、滑って前へ行けない。日曜は週

に一回使役に出て山くずし、糞に積んで所外の広場へ。ボールや十字手で山を壊す時、飛び散る破片はシューバに付いていて、舎内に入ると溶けて臭っていた。

#### 食生活

満州から食べる物は何でも運び込んだ。馬糧糲はすぐに食べる品物でない。しかし加工する糲摺り精米の機器がない。どうすれば良いかと言われても仕方なかった。炊事で支給を受けた糲をそのままかき混ぜて炊き、糊の中に糲と糲殻の入った物を食わされたことがあった。食えたものではないが食った。口の中は傷だらけ、舌が痛かった。糲殻だけを吐き出すのだ。自分は初年兵の十二月に盲腸の手術をしたので少しぐらい糲殻を呑み込んでも心配はなかったが、食えたものではなかった。入所当時は炊事は旧軍隊式で、麦缶に入った物を宿舎に持ち帰り分配するのである。麦缶は、日本の乾燥野菜の入っていたブリキ缶に木枠を作って二人で運ぶようにしてあった。雪の凍てついた庭を二人で運んでいるのを、飯盒や缶で近寄ってすく

い取りをして逃げたすくい取りドロボウがいた。生きんがためには何でもする。元気でダモイをしたんだらうか、その人は。

舎内では飯盒もあったが、アメリカ製肉缶に統一していった。それを袋に入れて食器がわりに使っていた。同一の缶は分配に公平でよいものだった。分配は皆の目が光っていた。それが少ない、それが多いと分配は大変だった、砂糖・煙草・ラーズの配給も。ラーズは米国製で、トロ箱の大きさは幅十五センチくらいの豚の皮の部分で、塩漬けの物だった。日本人には馴染まないものであったが、寒い冬を乗り切るためには食べなくては体がもたないと言って私は食ったが、明かり代わりに白樺の皮と共に灯して顔が煤で黒くなった。電球がないロシアでは、電圧が高いので日本の電球を並列にハンダ付けをして使っていた。入ソ当時は満州から運んだ物資を、ある物で代替しながら配給したように思う。当時が一番辛かった。椀を盗んで来て水筒に入れ、棒でついて玄米を白米にして食っていた者もいた。

炊事からの配給で思い出すのは、さきの糊粳殻、缶の底に大豆少し、また馬鈴薯の小さいのが六個ほど、ふすまのサラサラの汁、こんなものでは働けない。黒パンを後で食べようと片付けておけば、鼠でなしに人に盗られる始末。こんな事では不衛生とのことで食堂が出来る。食券をもらって食堂で食事である。大隊毎に券の形を変えて作った。偽造券で二度食いがあるのが良く変えた。仕事による級食券も作ったと思う。まだしっかりしてプライドを持っている者もいるが、帰れない、寒い、辛い、ひもじいとなれば恥も外聞もない。放心状態、夢遊病者、餓鬼だ、極限の状態だ。シラミと南京虫に吸い取られる時期はひどかった。パーニヤ（風呂）、カメラ（熱気消毒）、洗濯、着替えが順調に行くようになると少しずつ元気が出てくるのであった。

煙草の吸殻は捨てる。作業場への途中子供が黒パンを食べていると、くれと言う。子供がちぎって投げると取り合いだ。日本人の満州での生活を知っているソ連人が言ったことがある、文化的なきちっとした生活を

していたのにこのようなグリヤズナ（汚い）生活をどうしてするのだと、もっとプライドを持って。悔しかった。穀物のある倉庫の仕事場や製粉工場の仕事をするグループは元気なものだった。寒いのに冷たい粉を体に巻き付けて、小麦をズボンの中にそれぞれ入れて持ち帰る。他の作業場の者は煙草や砂糖と換えてもらい恩恵を被っていた。春になると草も、秋には茸も、蛙も蛇も食った。舎内に大きな鼠がいて、靴やツツカケを投げて捕まえ食っていた。作業帰り、茸や畑の残り馬鈴薯、蛙を袋に入れていた。煮えたのを持って来てくれたので井上通訳と二人で食った。おいしかった。草と言えば毒ゼリを食って命を落とした者がいた。食堂の入り口に見本を置いて事故のないようアピールした。

食堂で食事をするようになるが、何をしていてもひまじいには変わりなし。私はいつも井上通訳と食事に行った。彼は小食であったから何かを私にくれた。それを知っている人も多くいた。僕等が食堂へ行くのを待っていて僕等のそばに来る。こちらから食つてく

れるかと言わざるを得ない。今なら失礼なことだがその頃は仏様か。

ソ連側も食事について色々気を付けていた。量が完全に皆に公平に消費されているか、カロリー計算をしたメニューを一週間分作り発表、それによる伝票にて材料の配給をした。入ソ当時は味噌があつたがそのうちになくなり、原料の大豆と岩塩が配給された。大豆は何にでも使えるが塩は残る、食堂の倉庫の隅に余った塩をよく指摘された。ビタミンCには気を付けた。冬期、野菜不足を補うため大豆モヤシを作った。九六%のふすま（小麦粉）と酵母でドロージを毎日夕食後に飲ませた。これに干し葡萄を入れるとアルコールが増えるので、グループや隊のダモイの送別会に一週間分を貯めて使っていた。

話は食うこと、故郷の味白慢、オハギがポタモチが食いたいと、食うことばかりだった。祝日休日にはオハギ、ピロシキと、ポーバルに菓子職の人がいたのでメニューにのせて皆に食ってもらった。所長から仕事の成績を上げるにはどうしたらよいかと問われ、米を

食わせろと言ったものだ。値が高いから決っていたが、出たこともあった。肉は最初は米国製缶詰ソーセージ、七面鳥が多かった。魚はソ連製の鮭缶だ。中に膨張しているのがあって、一度食中毒を出したことがあった。次から鮭缶を切る時は気を付けるよう注意した。二、三年目は肉は羊が主だった。枝肉で冬期は普通の倉庫に積んであった。春四月下旬になるとボーチカに塩漬けにした。こんなことを書いてみると入ッ当時のことを忘れてしまうようである。

### 民主運動

三カ所の食堂を管理し、全員の被服も管理しなくてはならない。私は民主運動には積極的でなかった。ごまかすようだが文化活動で協力をした。絵を描いた。枠を作って豆の袋を張ってキャンバスを作ってもらい、顔料をもらって来て油は食堂で食用油をもらって描いた。展示会に出展した。他隊のいつも食堂等で出会う主計仲間から、清水さん絵を描くのやなあ、うちの本部にくれと引き取られて行った。油が食用油であり変色していった。その後小説を書いた人が本を作っ

た。その挿絵を頼まれて描いたこともあった。これが私の民主運動であったか。

### ダモイ

ダモイはいつかと占いが流行った。誰がやったかコックリさんがどこでも流行った。気を紛らわしていたようだ。

ダモイが始まり、高齢者や労働には無理な人達から帰り始めた。キャピタン（大尉）で美人の女医が検査をした。OK（オカ）、栄養失調、健康を分けて作業者とダモイが決まったようだ。将校は将校ラーゲルへ（畠山大尉はダモイで残る）出て行った。その時、本部の主計に来てくれと言われて思案をした。ダモイが始まっているのにと。これは最後になる、断れば反動の罵りを受けるだろうし、帰れなければ寒い冬を越さなくてはならないと困った。

被服の倉庫に満州から入っている日本の糸が員数外にあったので、それをカントーラの事務員マーシャにやったら、ラーゲルの政治部将校に知れて呼び出され注意を受けた。日本ではそれくらいは良いかもしれな

いがソ連（社会主義国）では一番悪い事だと脅されて、日頃の仕事や何やらでチェルマーに入らずに済んだが、皆と一緒に帰れなかった。一緒に入ソした辻井君も七月にコムソモリスクの駅まで送って行った。別れ際に、八月には二分所も閉めると言ってるから、帰ったら家へそのうちに帰ると伝えてくれと手を振って別れた。その空しさ。大工さん、靴屋さん、食事屋さん等、所内整理要員十数人の長として残る。

糧秣被服の残数の引き継ぎを済ませて九月に十四分所に移動する。ここで二千人二編成するが一次にはまだ入っておらず、二次によくやく入っていた。ここでも一週間ばかりアムール川岸の倉庫に仕事に行く。舟から川岸の倉庫に鮭のタル詰のポーチカを入れる仕事であった。足場から落としてポーチカを割った。修理するロシア人の職人がいるが全部元に戻らない。彼らはそれをもらって帰るのである。二分所を整理すると、残留者に鏡や置き時計を残して行った。それを皆換金した。五十五ルーブルほどあった。

最後の日作業を始めかけると、コンピナートのセク

レタール（秘書）がナチャーニク（社長）に、ラーゲルから日本人がダモイするのですぐ帰してくれとの電話があったと告げに来た。「オイ、ダモイの電話や」と言ったら社長がわかっているのかと言った。ダーのやりとりで、現場を元に戻してくれと言うので片付けてラーゲルへ。その日はカンボーイもいなくて、社長に頼んでこのルーブルで煙草を買いたいののでマガジンに案内してくれとお願いで、帰り道のマガジンで全部煙草を買って全員の土産にした。マツチ（火の付きにくいスピーチカ）もあったが火打ち石で火を付けた。それも家に土産に持ち帰ったが、今は見つかからない。ここで今まで行動を共にした者は一人も居なくなった。

ナホトカまでの途中、停車するとロシア人が寄って来て、日本人は頭の毛が皆黒いなど話し合っている。年をとると白い人もあると言うと、それはロシア人も同じだと笑っていた。ナホトカでは色々の地区から来た者達の違いがあった。二分所で送り出す時は下着は全員に一着別に持たせ、検査をして駅まで交換品を馬

車で持って行った。私は駅でも悪いのは替えた。靴まで二足も持っていたので供出をしたのだ。

九月十七日頃十四分所を出発したと思う。ナホトカの便所は海の上だった。下を見ると大きな魚のカレイが掃除していた。三日ほどナホトカで色々手続き、注意を受けて復員式をした。山澄丸に乗って、これで日本へ帰れると思った。丘を見ると隊を組んだ日本人が民主歌を歌いながら行進していたのを思い出す。船室で滋賀県の人がい話をしていた。日本海は静かな海風だった。

ようやく着いた舞鶴で三日間の間に米軍の日本人二世の将校のMPに質問を何回もされて、私の人間が変わった。ラーゲル内のことはよく知っていた。民主運動には積極的になく主計の仕事を一途にして来た者であつたが、質問者の問い「帰ったら共産党に入党しますか」に、はっきり「はい、入党します」と答えた。「ハッキリしますね」と二世は言っていた。

七年前の入営時の家族写真を見て、その感覚しかない自分は、京都駅で出迎えてくれた兄弟等の変わりよ

うに驚いた。全く浦島太郎だった。

## 戦後

舞鶴で頭に来て言ったことは、以後、性分として嘘はつけない。翌年入党するが、何かと影響することは言うまでもない。一カ月休養して十一月電車で復職。労組の委員になり、運輸士会の会長になった。当局は脱党を勧めるが、受けずにレッドページを受ける。三年間法廷闘争を続け仲裁和解をするが、再就職はない。

食わんがためには、土地を利用してこれからは花作りでと花卉類の栽培を始める。栽培出荷の組合を創り、生産活動を指導する。県の花卉園芸協会を創り会長もする。農協の監事になるが、一年で技師として職員になる。これは定年まで勤める。職員になると同時に人生意気を感じて町議会に立候補、当選。昭和三十一年より四十七年まで活動するが、農協役員と意見対立で辞める。農業委員は七十歳まで十二期を務める。農協の労働者の労働条件の改善の為労働組合を結成、委員長、単協労組県組織の結成、初代委員長を務め

る。

レッドバージ後、政令違反容疑等でペクられ、ガサを何回も受け、永い間警察の尾行を受けていた。山に行っても川に釣りに行っても、少し離れて警官が上下に釣りをしていた。

#### シベリア墓参

ダモイ時、二度とこんな所へはと思っていたのは誰も同じだと思う。しかし、帰りたい帰りたい故郷への思いを果たせず何であんな所で命を落とさんならんね、その無念さを思ったら一度でいいから慰霊の墓参に参加したいと誰に相談するともなく参加を申し込み、平成四年のコムソモリスクに参加した。

男泣きにお経をあげた。涙してまともに読めない。水だ酒だと注ぐ。そこに咲いている百合の花、キスゲの花を手折り供えた。無事墓参を終えたが、霊が呼ぶのか、平成五年も戦友と共にコムソモリスクを訪ねる。動けるうちに平成七年、もうこれが最後かと平成十年と墓参。その年プリモール（沿海州）の墓地調査を依頼された。遺骨収集がスムーズに行われるため

の事前の確認調査である。厳しい仕事であるが、半月間の調査を富士市の望月氏と二人で任務を果たして来た。

シベリアのことは動ける間は付きまとうだろうし、死ぬまで忘れることは出来ない。二度とおろかな戦争をしてはならない。戦争の犠牲者は私等で終わりにと訴えて、筆をおく。

#### シベリア抑留体験記

大阪府 有光 徹二郎

大東亜戦争勃発の昭和十六年七月十九日「関東軍特別大演習」との名目で召集令状が来た。私は出征兵士としての赤袴もかけてもらえず、歓呼の声にも送ってもらえず、ただ一人さびしく、こそこそと朝倉の高知連隊へ入隊したのである。それは、全国的大召集であったので、敵国のスパイの目を恐れて、目立たないよう入隊せよとの軍の敵命のためであった。